

好奇心紀行

阿刀田 高



こうきしんきこう
好奇心紀行

あとうだたかし
阿刀田高

© Takashi Atoda 1997



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1997年10月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-263621-2

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

江苏工业学院图书馆
藏书章

阿刀田 高

講談社

好奇心紀行●目次

〈知の旅〉

短篇から長篇へ……………	11	言葉の響き……………	75
書評嫌い……………	15	お不動様の紙……………	78
テレビ的理由……………	18	わが母校・ふるさと屈折事情……………	81
小説家の工房から……………	21	私の四郎丸……………	85
本を贈る悩み……………	26	苦手科目……………	88
虚構の原点……………	30	うろたえた父……………	91
私の好きな恐怖・幻想文学……………	40	やり残したこと……………	97
オー・ヘンリーに倣って?……………	46	猿の美意識……………	100
安部公房の文庫、ベスト・スリー……………	48	お金について……………	103
国立国会図書館・昔と今……………	50	プロ野球ファン総集篇……………	108
日なたぼっこも魅力……………	55	マーフィの法則……………	117
微笑……………	59	京の女に云う吟醸酒……………	125
思い出すまま短篇五つ……………	65	天正少年使節団は何を見た……………	132
関脇としての龍之介……………	70		

〈足の旅〉

時差について……………141

三つの旅……………145

断片的トルコ紀行……………148

ボン岬まで……………155

幻の大灯台……………161

公園と博物館の町……………167

ガイドは小説家が嫌い？……………175

一枚のフォークロア……………185

アジアの風……………221

初出一覧……………258

解説……………260

本文写真

菅洋志

好奇心紀行

〈知の旅〉

短篇から長篇へ

『冷蔵庫より愛をこめて』は、私の最初の小説集であり、小説家としてのデビュー作でもある。雑文書きをしているときに知りあった編集者から、

「小説を書いてみませんか」

と勧められ、私がまず考えたのは短篇小説であった。

「短篇集は売れないからなあ」

と、その編集者は難色を示した。これは今日でも充分に生きている鉄則であり、新人作家が短篇集でスタートをするケースは本当にめずらしい。

だが、私としては、

——ロアルド・ダールやヘンリー・スレッサーのような短篇小説を書いてみたい——

という強い願望を持っていた。

現代人の日常を描きながら、最後に恐怖のどんでん返しがあるような短篇小説、それならば書けそうな気がしたし、それなりの読者はつくのではあるまいか、おぼろげながら目算がないでもなかった。

そんな作品を小説雑誌に一つ、二つと書いては一冊の本を作るにふさわしい枚数になるのを待った……と、こう書いてしまうと簡単に聞こえるかもしれないけれど、駆けだしの作家には小説雑誌もそうそう原稿を注文してくれるものではない。しかもせっかく雑誌に発表したものでも、

「これ、あんまりよくないですね」

と、短篇集作成のリストからはずされるケースもある。

二年ほどの日時を費やしただろうか。三十数篇の短篇小説の中から十八篇を選んで現在の目次を作った。

そこそこの自信はあった。

売れるか売れないかという見通しではなく、これで失敗するようなら、日本の読書界に、この方面の読者はいない、つまり作品そのものに問題があるのではなく、方向がまちがっている、そういうことなのだろうと考えた。

さいわい、評判はよく、直木賞の候補にもあげられた。それまでの直木賞の傾向から言え、ちよつと異端の作品集だったから意外でもあり、とてもうれしかった。このときは受賞を逸したが、引き続き出版した同種の短篇集『ナポレオン狂』が第八十一回の受賞作となり、運のよいスタートとなった。

『冷蔵庫より愛をこめて』は今でもよく売れている。文庫本は三十二刷を数え、五十万部に近づいている。わが家の米びつのような存在である。

いま読み返してみると、未熟なところもたくさんあるけれど、それぞれの作品にこめられたアイデアは、われながら、

——よいアイデアを使っているなあ——
と感心する。

正直なところ、私は、この先、これより巧みな短篇小説集を作ることにはできるだろうけれど、これほどみずみずしいアイデアの短篇集はけっして書けないだろう。くやしいけれど本音である。

短篇小説で出発したせいもあって、十数年ずっと短篇小説を書き続けて来た。だが、自分としては短篇小説だけの書き手とは思っていなかった。

数年前から少しずつ長篇にも手を染め、今はじつくりと時間をかけて執筆する長篇にも

少なからず興味を覚えている。

過日、脱稿した『海の挽歌』は、そうした試みの一つである。この作品のテーマは、古代ヨーロッパの海洋大国カルタゴである。古代ローマと戦って敗れた悲劇の武将ハンニバルである。

そのハンニバルを現代を描く小説の中に登場させてみようと考えた。あえてキャッチフレーズをつけるならば、歴史紀行小説とも呼べばよいのだろうか。

北アフリカに栄えたカルタゴの史跡を現代人が訪ねながら、昔をしのび、歴史と人間を考えるとといった趣向である。

それなりの小説にはなったように思っているけれど、この先の評価は著者の私に属することではあるまい。脱稿のあとには、安堵あんどとともにいつも不安のひとときがやって来る。

書評嫌い

書評には“する”場合と“される”場合とがある。

書評をすることについて言えば、私はあまり好きではない。正直なところ嫌いである。書評の仕事が成立する情況は、ほとんどの場合、電話のベルが鳴り、受話器をとると、新聞雑誌の書評欄の担当者が、

「○○さんが書いた××という本、書評してくれませんか」
「はい」

と答えれば、その本が送られて来る。

たいていは新刊の本である。だから読んでない。読んでないうちに約束をしてしまう。これが困る。